



本棚に四十冊の聞き書き本がある。本の中の語り手が話しかけてくる。身を屈め耳と口元を寄せ合って聴き始めた。話はこうだ。

◆わしはあの時医者を辞めていた。2020年新型コロナウイルス感染症が猛威を振るった。欧米では医療が崩壊した。日本は崩壊しなかった。良かった。戦後、復員船から降りて手取川の川原沿いの貧しい村に医院を開いた。医療過疎の村だった。患者が家で死ぬ、診てもらわないで死ぬ。そんなことが当たり前にあった。鞆一つで「はいはいはい」って回るリクツな先生でなあ。患者は「家の二階」や、やっと診て家の事情を聴きながら書類をつくり、ストマイを打つ、土日夜中も往診して回った。息子たちも今感染リスクを避けながら医療している。私の時は結核、今はコロナ。歴史は繰り返す◆ また一人が来て、こう言った。

◆もう8月やね、若い頃の一番の楽しみは村の盆踊り、樽で唄った。「はるばいな」「ちょんがり」が持ち唄、夜通しやった。今は「炭坑節」が多いかなあ。けどなあ 2020年は春先頃からコロナウイルスでたくさんの感染者が出た。「自粛」に「ソーシャルディスタンス」。長く続いた盆踊りも中止になった。施設に居た。家族も親戚も誰も会いに来てくれん。寂しかった。楽しみなテレビが変わった。「新しい生活」「新しい日常」「こんな暮らし方がいいよ」だって。似たような教えを子供の頃に聞いた気がする。冗談じゃない。新しい？押しつけのものは要らない。これまでの「生活」「日常」に戻るのがいい◆

二人が去って目が覚めた。本棚から「大丈夫だよ。物語りの中の一コマよ」と聞こえる。聞き書きに行こう。

医学生レポート「グリーンマイル」

金沢大学附属病院緩和ケアセンター 山田 圭輔

【はじめに】金沢大学医学生との「生と死」を考える実習でとり上げられた映画グリーンマイルを紹介する。

【医学生レポート】

グリーンマイルとは処刑台までの道のことである。1930年代の米国で、黒人のジョンが誤認逮捕され監獄に送り込まれる。ジョンは優しく純朴で不思議な癒しの力を持っており、看守のポールなど多くの人々を病気の苦しみから解放する。ポールはジョンの無実を知り脱走を提案するが、ジョンはもう疲れきったと断る。ジョンがグリーンマイルを歩く時、ポールが「俺たちはお前を憎んでいない、わかるだろう」と声をかけるとジョンは安堵の表情をみせるのだった。後年、ポールはジョンの理不尽な死や、愛する者達との死別にひたすら耐えながら生き、「人は必ず死ぬ。例外はない。だが神よ、私のグリーンマイルはあまりにも長く感じられるのです」と嘆くのがあった。

緩和ケアに関わる医療者も、ポールのような存在なのかもしれない。理不尽な病気に疲れ果てた患者に対してできることは、声をかけ、グリーンマイルをともに歩くことだけなのだ。グリーンマイルが長く感じられる原因は、恐れ、怯え、怒り、不安、孤独などの精神的苦痛であり、医療者も精神的苦痛に苛まれやすい存在である。患者のためにも、自身のためにも、怒り、不安や孤独を和らげられる様々な考えを知り、自分の中で深めそれら話し合える仲間と時間を持つことが重要だと考える。

【おわりに】医学生との実習では様々な作品、考え方や表現を学ぶことができた。「金沢がん哲学外来」は自由に生と死を語ることを目的にして冒頭の講演で医学生レポートを紹介している。



「日常」を捉えなおすこと

岩手県立中央病院 がん化学療法科長

加藤 誠之

人類にとって感染症との戦いは、古くて新しいものです。歴史を紐解くと、ペストや天然痘、スペイン風邪などの世界的流行が記されています。14世紀にあったペストの世界的な流行では、ヨーロッパで人口の3分の1が亡くなり、北部イタリアでは致死率80%、多くの街が消滅したと言われています。この時代を生きたのが、ジョバンニ・ボッカッチョで、彼はペストの第一波の流行直後から、『デカメロン』を書き始めました。ダンテの『神曲』にオマージュした作品です。

ダンテの神曲は崇高な詩、清らかなる旋律ですが、デカメロンは艶笑文学とも言われる散文で、世界の崩壊を予感する暗い時期に、この作品が生まれたことには、驚きと共に違和感があります。ボッカッチョは最初の神曲の理解者でした。彼には、ダンテに倣って人類史上に残る作品を書き上げたいという希望があったと思われますし、ペストを生き残ったという純粋な喜びもあったでしょう。しかし、なぜ、彼がこの時期に人間の下品さ、卑猥さ、純朴さを描いたのか。そこには、社会の死滅が肉薄するなか、市井の豊かな機微を書き残したいという切なる思い、「日常」への深い愛着があったと思います。

さて、コロナウイルスに対処するための「新しい生活様式」は、あくまで便宜的なものです。今後、真に求められていくのは、我々の置き忘れてきた「日常」を捉えなおすことでしょう。社会の劇的な変容の時にこそ、日常、すなわち人間そのものを問い直すことがルネサンスとなります。その一方で、空に懸かる星を目指すかに見えて、星が水に映る影、幻のイデオロギーに飛び込むならば全体主義となる、このことこそ、我々が歴史から学ぶべきことでしょう。

親子で楽しむ便育の絵本



「今一番したいことはなんですか？」の問いに何と答えられますか？脳腫瘍で闘病していた母に37年前にかけた言葉です。母は、細々と「海がみたい」といいましたが、その希望を叶える間もなく母は他界しました。

看護の道を歩み始めたわたしの本棚には死や病いの語句が並びました。「死を包む言葉」たちとの出会いがわたしの支えでした。

5年前に訪問看護ステーション「ややのいえ」を立ち上げました。今も「一番したいことは何ですか？」と毎日お尋ねする日々です。

突然の脳梗塞で声を失い右半身不随となった免疫学者多田富雄氏と、原因不明の難病で闘病していた遺伝学者柳澤桂子氏の往復書簡「露の身ながら」(集英社、2004)で、闘病の日々から紡ぎ出された言葉の意味は重い。冒頭が多田氏の「今はこんな状態でとっさに答えができません。しかし僕は、絶望はしていません。長い闇の向こうに、何か希望が見えます。そこに寛容の世界が広がっている。予言です。」という言葉は、コロナ禍の今を予言していたかのようです。「人間社会は、他人の言動や異文化を受け入れることが大切だ。免疫は異質なものを排除する重要な役割を担っているが、異質を完全に排除しようと思うと、正常なものまで壊してしまうことがある。そこで、免疫は異質なものと共生しようとする。まさに寛容の世界が存在して、人間の体は複雑で高度な機能を発揮しているのである。」今、この時代だからこそ「寛容の世界」の存在を信じて、未来への「希望」を語り合ひましょう！

『うんこ文化センター おまかせうんちっち』のご紹介

世界中のすべての人が気持ちよくうんちできる世界を目指して、相談、YouTubeチャンネル「POOPOOLAND」等での情報発信をしています。ステイホーム、テレワーク、ソーシャルディスタンスとカタカナ言葉の生活で、不規則な生活や食事、ストレス、運動不足等で、便秘や下痢などの排便障害を抱えてお困りの方からのご相談が増えています。高齢者やご病気の方々だけでなく、2か月の赤ちゃん、2歳の幼児、小学生、中高生、大学生、妊産婦さんからのご相談にもなっています。Zoomやお電話でのご相談にもなっています。

このたび日本看護協会出版会から監修させていただいた絵本「そのときうんちはどこにいる？」が発刊されました。読んでいただくだけで気持ちよくうんちできるようになるしかけがつかまったどなたにもお薦めの絵本です。

「禍を転じて福と為す」

昨年ふと見た占いのページに「2020年は『激動の年』になる」と書かれていました。こんな激動がやってくるとは思ってもありませんでしたが、『新型コロナウイルス感染症』です。私が住んでいる福井県も一時大変な状況に陥りました。いろいろな事が一気に自粛となり、メディカルカフェも開催中止となりました。あの時の、今までのやり方が通用しなくなる、物事が根底から崩れて途方に暮れる感覚は忘れられません。

この事態はいつになったら終息するのだろうか？と不安に押し潰されそうな日々を送っていました。このような時に不安を感じるのは当然です。特に今回のような感染症や災害など自分がコントロールできないものをどうにかしようと我慢や無理を重ねて頑張りすぎると不安や緊張が過剰になりこころが落ち着かなくなってしまう。

私は自分のこころを保つために「大きな変化のある時⇒良い変化をもたらすチャンス」だと、この時だからこそ得られる何かがあるのだろうと考えることにしました。「禍を転じて福と為す」です。

また、いろいろ考えることをやめて「今の自分ができること、目の前のことに取り組もう」と焦らずに1日を過ごすことを意識し、一日1回は呼吸法でのリラックスタイムを取り入れるようにしてこころを落ち着かせました。そうしながら三ヶ月が経過して、私自身は「禍を転じて福と為す」ことができた実感できるまでにはまだ至っていませんし、第2波、第3波のことを考えると不安はよぎりますが、日本や世界の皆さんのこれからにとって良い変化を感じられることが生まれてくるであろうことを期待して日々を楽しみたいと考えています。

<編集後記>

この六月から全国のメディカル・カフェが「開催」され始めている。待ちわびていたかのように、一斉に、である。会場に拠っては、人数制限がされていたり、「向き合って話し合わないこと」など、自由には開催出来ないようだが、それでも「中止」、「延期」という事態よりは、よほどましであろう。

さて、「第3回音読会 ～武士道 新渡戸稲造～」のご紹介をさせて頂く。

会場：新渡戸稲造記念 中野総合病院 中野区中央 4-59-16

TEL 03-3382-1231 JR・地下鉄東西線 中野駅南口下車 徒歩4分

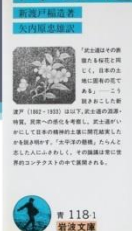
参加希望の方は、中野総合病院 患者支援センター(内線 214 高村)まで連絡してください。音読のテキストとして、新渡戸稲造著「武士道」(岩波文庫 矢内原忠雄訳)をご持参下さい。樋野先生を囲んでの音読会です。(がん哲学外来市民学会 広報 星野 昭江)

第3回 音読会

～武士道 新渡戸稲造～

日時：2020年7月16日(木) 18:00～
場所：2号館3階会議室

武士道



樋野典夫新渡戸稲造記念センター長を囲んで、新渡戸稲造先生をより深く理解するために「武士道」の読書会(輪読会)を開催いたします。



※この会は業務ではなく、サークル活動ですので、お気軽にご参加ください。
1時間半～2時間程度を予定しています。

